

理事会便り

第16回(13期)常任理事会議事録

日時: 昭和40年9月7日(火) 1530~1800

場所: 東京管区気象台会議室

出席者: 畠山, 北岡, 岸保, 神山, 桜庭, 今井, 須田
大田, 増田, 吉野, 小平, 安藤各理事(順序不同)
議決

1. 昭和41年度気象学会賞候補者推せん委員会には、次の5会員に審査委員を委嘱する。
北岡竜海(委員長), 柳井迪雄(幹事), 高橋浩一郎, 孫野長治, 小倉義光。
なおこの5会員は藤原賞候補者推せん委員を兼ねるものとする。
2. 朝日賞・松永賞の候補者の推せんは、上記の気象学

会賞候補者推せん委員に依頼する。

3. 「天気」に口絵写真をのせない時は、本文を2頁増すことを承認する。
4. 気象集誌の編集委員に栗原宜夫会員を補充することを承認する。
5. 「海洋と気象の相互作用」についての第2回シンポジウムを本年11月に開催することを承認する。
6. 今秋の大会に「成層圏のシンポジウム」を行なうことを承認する。
7. 「通風しない乾湿計の水蒸気圧算定公式」については委員会の原案を認め、気象庁にこれを提出することを承認する。なおその際有効ケタ数について付記するものとする。

月例会(気象統計)講演要旨

会期: 10月15日(金) 13時より 会場: 気象庁予報部会議室

1. 鈴木栄一(気研予報): 離散型変量を含む場合の
相関理論とその気象への応用(20分)
最近離散量と連続量の相関理論が Olkin and Tates (1954, 1960) により展開され、2変量離散型分布式も筆者により与えられた。それを用いて、下層ジェットの有無と雨の関係、相関ある2つの極値の同時出現確率などが求められる。また変量が3個以上ある場合の相関理論(有意性検定を含む)を用い、雨の予報に用いられる予報因子の内部関係をしらべてみた。
2. 山田一, 増田博, その他(気象庁予報部)
A. D. P. と手書による北半球天気図との比較
(20分)
現在作成されている 500mb 北半球 A. D. P. 天気図と手書による天気図とのシノプティックパターンとから見た差異を地域別に比較検討した。
3. 高橋浩一郎(気象研): 初期条件の誤差と予報の精度(20分)
初期条件の誤差が予報値に及ぼす影響をいくつかの面から調べてみた結果について報告する。
4. 大井正一(気象庁): ベース転換について(20分)
今日ベース転換判断の重要な要素として循環指数, 波数分析60°E, 40°E シーケンス, 緯度別, 経度別 500mb

シーケンス, ジェット気流解析等が使用されている。私には地上及 500mb, 300mb, 100mb 天気図の高低気圧経路の追跡 140°E シーケンス等を附加して見た。今回は後者のみについてその利用度と限界についての経験を述べたい。

5. 荒井康(気研予報): 500mb 面の相関場の解析(第2報)(20分)

今回は空間スケールの小さなじょう乱に関して、time lag 0~7日の相関場の2, 3の特徴について述べた。今回はこの他に、空間平均場の特性について述べる。空間平均はさらに、9日の移動平均とそれからの差に分けて考察したが、このように分ける意味についてもふれる。この解析で多くの問題点があることを感じているので、それらのことについて報告する。

6. 大井正一(気象庁): 予想天気図作成について(20分)

予想天気図技術については既に8月に別に述べたが、これに更に幾つかの動気候的な要素を加味すると有益である。例えばシベリヤ高気圧が停滞する場合、上海低気圧が発生する場合、オホーツク低気圧が発達する場合等には季節的な要素が加わっているように見える。従ってこの技術も場合によって適合度が変わってくる。こういう点についての経験を述べたい。